

## 私の生徒指導 ①

# 他者や社会とのかかわりの中で 自分のあり方を考えさせる

山梨県立甲府南高校 三枝正人

三枝正人先生は、生徒同士がかかわり合い、自分の意見を言いつつ、相手の考えを聞く活動に力を入れている。多角的な見方を示すことで、自分の生き方を考える機会になることを期待すると話す。

### 授業中のグループ活動で 視点の多様性に気付かせる

ものの見方はいろいろあり、多角的に物事を見て、多様性を認められる人になってほしい。私はどの場面でもそう考えて生徒と接しています。

担当する日本史の授業では、1つの史実にもいろいろな光の当て方があることを伝えます。日本の歴史は隣国抜きには語れません。中国や韓国、アメリカ、ヨーロッパなど、日本とは別の視点から歴史を見てみることを生徒に促します。1つの出来事にもその根幹を成すものがあり、同じ幹から違う枝が出ている。人々

の営みをつくり上げるスケールを感じさせ、自分の生き方に照らし合わせて考えられるように話しています。

4年前からは、授業にグループ活動を取り入れています。毎授業は出来ませんが、史料から読み取れることや人物の行動の意味するところなどを、3、4人のグループで1分半ほど話し合い、そこで出た意見をグループの代表が発表します。席が近い者同士で作ったグループなので、男女関係なく、普段は接点の少ない人と話すことにもなります。席替えがあれば、メンバーも変わります。そうして、いろいろな人と話し、視点の多様性に気付くことを期待しています。

生徒の発想に、私自身が勉強させられることもあります。その時はその場で「先生も思い付かなかった」と生徒を褒め、後で調べて分かったことを、次の授業で話すようにしています。そうしたやりとりは、生徒の自己肯定感を高め、クラスが自由に発言できる雰囲気になります。話し合いが活発になり、多様な考えがますます出るようになるのです。

### 共感と感謝が 他者を思いやる心を育む

担任時代は、LHRでもグループ活動をよく行いました。例えば、生徒に学習方法の悩みを紙に書かせて

集め、名前の部分を切り取った上で無作為に選んで発表し、それに対してみんながアドバイスするのです。また、「勉強で不安に感じていることをぶつけ合おう」というグループ活動もしました。どんなに優秀な生徒でも不安に思うことがあります。「すぐ眠くなる」「英単語が覚えられない」などの不安を言い合い、グループ内でアドバイスを申し合いました。そのような活動を続けると、生徒の横のつながりが深まり、他者の助けを得ることに感謝の気持ちも生まれてきます。そして徐々にですが、他者の思いに考えを巡らせ、それを認めながらも、自分の意見も言えるようになっていくと感じます。

## 友だちの将来像を聞き 自分の未来を思い描かせる

進路指導主事として、学校全体でも他者理解を促すような活動を始めました。1・2年生の「総合的な学習の時間」では、前期に、1年生は職業、2年生は学問について各自で調べ学習をし、その結果をクラスで発表します。後期は、前期の内容を踏まえて、1年生は「私の夢〜私と仕事〜」、2年生は「私の夢〜私と進学〜」と題して自分の夢をクラスで発表します。発表後は、各発表を聞いて分かったことや気付いたことなどについてのコメントを、発表ごとに各自が書き、



山梨県立甲府南高校  
三枝正人  
さいぐさ・まさと  
教職歴25年。同校赴任歴14年  
目。進路指導主事。日本史担当。

### 山梨県立甲府南高校

◎1963（昭和38）年開校／全日制、普通科・理数科、共学／1学年約280人／2013年度入試合格実績（現役のみ）は、国公立大は、東京大、山梨大、京都大などに155人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、早稲田大などに延べ311人が合格。

誰のコメントなのか名前が分からないようにして、クラス全員分のコメントを各発表者に渡します。

この活動は、生徒それぞれが発表の仕方を工夫するなど、自分の考えを発信する力を育む場となっていました。また、友だちが描く将来像や、自分の夢がどう思われるのかを知ること、自分のあり方を考え直す機会にもなります。発表は1人8分程度掛かるので、1クラス40人いれば5時間以上にもなりますが、それだけの価値があると考えています。

更に、保護者にも子どもの進路に対して多様な考え方を持つてほしいと、保護者向け講演会では、就職やその後の人生にも目を向け、中長期的な視点で進路を考える大切さを話してくれる外部の方に講演をお願いしています。

## 失敗を恐れず全力で取り組み 後押しをする

生徒指導でもう1つ心掛けているのは、困難から逃げず、多様な体験

が出来るように生徒を後押しすることです。ある生徒から留学の相談を受けた時、私はすぐに賛成しました。その学校では留学をあまり勧めていなかったのですが、本人は気がとがめていたのですが、教務に掛け合った結果、彼はオーストラリアに半年間留学しました。また、浪人を決めた生徒には「浪人を楽しめ」と声を掛けています。自分がどれだけ伸びていくかを実感できる1年になると考えれば、ネガティブになる必要はありません。高い目標を目の前にした時こそ、失敗を恐れずに力を尽くすことが、新たな発見を生み、次につながるかと考えて、生徒が前向きに挑戦できるように後押ししています。

そのような姿勢で生徒とかかわっているためか、卒業生が度々訪ねてきてくれます。前述の留学した生徒は、今はNPOで働き、自分の力を社会に役立てたいと世界中を飛び回り、「先生が賛成してくれたから今の自分がある」と、年1回は顔を見せに来てくれます。また、センター試験の自己採点結果を持ってきて、出

願校を相談しにくる浪人生もいます。一緒に出願を検討した大学に合格してくれた時の喜びは、本当に教師冥利に尽きるものがあります。

私の担当は日本史ですが、理数科の担任を3年間持ち上がりでしたことがありました。県内屈指の進学校に入学したとうぬぼれている生徒を人格者に育て上げてほしいと、白羽の矢が立ったのです。学力に自信がある生徒ばかりでしたから、更に学力が上の他県の進学校を紹介して価値観を揺さぶるなど、さまざまな仕掛けをしました。それまで理系クラスへの担任経験がなく、生徒の視野を広げるためには何が効果的か、模索しながらの指導でしたが、結果的には多くの生徒が志望校に進学しました。生徒と共に、私も教師として成長できた3年間だったと思います。

生徒と向き合う時、私の価値観を押し付けているのではないかと思うこともあります。それでも、生徒が自らの道を考えるきっかけになればよいと考え、これからも生徒に広い世界を見せていきたいと思っています。